

# 外向性と団結力の紀州漁民

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

## くろしお物語

◇17◇

これまで紀州を中心とした海民が好漁場を求めて、地方の海に出かけ、その土地の浜を借りて長期間網漁をする旅網の姿をいろいろな形で見せてもらった。併せて、どうして紀州海民は旅網による漁業に積極的に取り組んだのかの疑問がわいてきた。

文獻「東国漁業の夜明けと紀州海民の活躍」によると、著者の杉浦敬次氏は次のように分析している。  
(1)紀州は山国で山地が海に迫り、農業だけでは暮らしが立たない環境にあった。そのため外の世界を求め、出稼ぎが当たり前になっていた。  
(2)出稼ぎのきっかけ

## 旅網支えた熊野魂

とされる人々が、漁業、商業、海運業、そして戦争の時は水軍(海軍)として、海の総合職のような活躍をした。そのチーム力が集団漁業を発達させた。広村(現有田郡広川町)の崎山氏、栖原野灘で、絶好の漁場になった。

次は紀州海民の優位性と気質を述べている。司馬遼太郎の著書「菜の花の沖」は、鯉漁を通して次のように指摘している。  
(1)鯉の群れは黒潮暖

(4)湯浅醤油の取材で知ったことであるが、醤油を絞出す丈夫な綿布の擦糸の生産技術で破れにくい漁網ができ、旅網を支えた。以上が社会背景である。次に紀州海民の優位性と気質を述べている。司馬遼太郎の著書「菜の花の沖」は、鯉漁を通して次のように指摘している。  
(1)鯉の群れは黒潮暖

く、藩に頼れない現場の漁民の結束が求められた。例えば、潮岬の明神で、西牟婁郡から12浦、東牟婁郡から6浦の計18浦の代表による鯉漁の順位をきめる寄り合いがある。  
毎年旧暦3月3日から5月5日までを第一



へ 肉



右下は「江戸名所図会」より

